

リレー随筆

大町文衛の『日本昆虫記』

奥本 大三郎

有名な大町文衛であった。

私の時代には、これは少し古い本で、虫好きの小説家では、北杜夫さんなんか、愛読した本である。確か、シンプルなペン画の挿絵が心に残ったと、書いておられた。

ところが、明治37年生まれの私の父も、大町文衛のことを知っていた。父は、三重県出身なので、三重高等農林のことを多少でも知っていたのかもしれない。

なんでも、このコオロギ博士のその父親は、紀行文の名手として有名な大町桂月だという。

桂月は、日本各地の名所を巡って、文章を残し、また、宿などのために揮毫した扁額が残っているけれど、その名が上がるとともに、桂月の偽者も現れたという。肖像写真も今のよう鮮明ではない時代であるから、桂月を名乗り、何日も滞在して、字を書いただけで帰った人が桂月の偽物だったということがあったらしい。その字がい

かにもまやかして、下手なので、どうもおかしいと調べてみて判明したそうである。

『日本昆虫記』の文章で今も覚えているのは、著者が戦地の教え子から受け取った手紙のことである。

その手紙の中に、蝶の羽だけが同封してあった。そして「行軍中に、アカボシウスバシロチョウ」を捕らえました。という手紙が添えてあった、という。蝶の身体ごと送りたいが、身体の厚みがあると、手紙がかさばるので、羽だけにしたのであるらしい。

*

その元学生のいる戦地というのが、モンゴルのほうだと、羽に、血のように赤い紋がある蝶は、三種ほどいる。

オオアカボシウスバシロチョウ、アカボシウスバシロチョウ、ミヤマウスバシロチョウである。

いずれも、立派な美しい蝶で、「シロ

チョウ」と、ついてはいるが、アゲハチョウの仲間、世界の、比較的寒い地方にいる。実を言うと、私は今、その仲間の蝶を取りに、モンゴルに行こうと友達からさそわれているのだが、体に自信がなくて、どうしようか迷っているところなのである。いずれにせよ、戦争で行くのでないのがあるがたいと思っ

(フランス文学者、作家)



『日本昆虫記』は、戦前の朝日新聞に連載され、好評を博して単行本になり、文庫本にもなつて、よく読まれたそうである。この本が日本でよく読まれたのは、まず、表題に『昆虫記』とつけたことが、その理由であろう。

この本は私の兄の本棚にあったので、小学生の私も読んだ。箱入りの本で、箱の表裏に、アオスジカミキリとルリボシカミキリの写真があつたように、覚えている。

著者は、三重高等農林(現・三重大学農学部)教授でコオロギ博士として

高知県立
文学館

高知県立文学館ニユース

藤並の森

vol.

113

2026.6

次回
開催

体感する ファーブル昆虫展

令和8年7月25日(土)〜9月27日(日)



当館では、7月25日(土)より「体感するファーブル昆虫展」を開催します。

ジャン＝アンリ・ファーブル(1823〜1915)は、フランスの博物学者です。「進化論で有名なダーウィンと同時代を生きたと言えば、時代がイメージしやすいかもしれません。ファーブルは大変苦勞した人で、教師になっても独学で学び、学



士号を取得します。その後、自分の道を博物学と定め、昆虫の観察に打ち込みました。その記録が、彼の代表作である『昆虫記』です。日本では『ファーブル昆虫記』の名で広く親しまれています。

『ファーブル昆虫記』の魅力は、何といつても虫たちのおどろくべき生態です。たとえば、道端のふんに群がる虫たちを見た時、小汚い、つまらない虫と思う人もいるかもしれませんが。しかし、ファーブルは虫たちの生活をあざやかに解き明かしてみせます。ある虫はふんを丸めて遠くへ転がし、ある虫はふんの下に穴を作つてそれを引きずり込み、ある虫は夫婦で巣を作り……まるで小宇宙のような世界を広げてみせるのです。他にも変わった形の巣を作るハチたち、ハチの一種に寄生するゲ

ンセイの不思議すぎる生態など、面白くてページを繰る手が止まりません。その記述はファーブルの徹底した観察と実験に支えられ、さらに彼の愛した文学や神話の美しい詩句が差し込まれることで、魅力を増しています。

今回の展示では、彼の遺品や虫たちの標本、その生態を深く知れる体験コーナーなどで構成。さらに常設展示室では、派生展示として高知ゆかりの作家による虫の作品、高知県の収集家による標本などを展示します。

実際に虫を観察する催しのほか、ダンボールで虫の標本を作るイベント、虫の入ったコパール(若い琥珀)を磨くイベント、虫の似顔絵を描くイベントなど、夏休みの宿題にピッタリのイベントも、たくさんご用意しています。虫の好きな方もちょっと

苦手な方も、きつとワクワク感を感ぜられる展覧会「体感するファーブル昆虫展」。ぜひ、遊びに来てください。

(学芸課/川島禎子)



スカラベの気持ちになれる「巨大ふん玉」

生誕100年記念

宮尾登美子展

生きてゆく力

令和8年4月11日(土)〜6月28日(日)



現在当館では「生誕100年記念宮尾登美子展」生きてゆく力」を開催しています。
今回の展覧会では、特に作家になるまでの半生に注目し、当館所



展示の様子

蔵の宮尾登美子文庫の資料を中心に紐解きました。

父親の商う芸妓娼妓紹介業という家業への劣等感が芽生えた少女時代、父の元を離れ、単身赴いた旧池川町での代用教員時代、夫に従い、幼い娘を連れて渡った満州・飲馬河、そして、敗戦後の悲惨な難民体験。それを乗り越えて夫の故郷の農村で暮らし、昭和22年、結核に罹患を機に書きはじめたノートはやがて小説へと発展。昭和37年には女流新人賞を受賞するもそこからはいまいった苦悩の10年間もがき、ついに到達した『權』で作家として大きく花開きました。

今回の展示では、昭和22年のノートに小説の形態をとった小品が綴られていること、保母時代のノートにはすでに『權』の終章で見られる母子の別れのモチーフが描

かれていますことなど宮尾文学の萌芽についてご紹介しています。

さらに新収蔵資料として、『權』他自伝的四部作の岩伍のモデルである父・猛吾の日記や「紹介人名詳細筆記簿」など、初期の宮尾文学作品の源泉となる資料を展示しています。端正な筆致に人柄が偲ばれ、居住まいを正さずにはいられません。作中の人物が眼前に表れたようなそんな錯覚に襲われ、実資料の持つ重みを実感することができます。



父・猛吾の日記や「紹介人名詳細筆記簿」

久寿栄の日記や愛用の一絃琴を展示し、作品世界をより深くご紹介しています。

徳島県出身の画家・谷川泰宏さんからは、朝日新聞日曜版で連載された「クレオパトラ」挿絵原画25点をご寄贈いただきました。展示会場は一層華やかな空間となり、観覧されるお客様は息をのむ美しさにその場を離れがたい様子も見受けられました。

関連企画としては、親交のあった作家・山本一力さん、文芸評論家の尾形明子氏をお迎えし、二度の記念講演会を開催。山本一力さんのご講演では、作品の誕生秘話ともいえる、作家同士の興味深いお話や、尾形氏のご講演では研究者としての独自の視点から女性作家の系譜に連なる宮尾文学を論じていただきました。

展覧会は6月28日(日)まで開催し、最終日には茶道を題材にした『松風の家』にちなみ、裏千家淡交会によるお茶席をご用意しています。ぜひ、お越しください。

(学芸課／岡本美和)

怖い文学展 閉幕！

香美市立美術館とコラボレーションという初めての試みを行いながら、当館ならではの切り口で「怖い」を探究する「怖い文学展」高知県立文学館×香美市立美術館が3月22日(日)に閉幕しました。

会期中は工作イベントやクイズなど様々なイベントを開催しましたが、なかでも「視える」作家・加門七海先生をお招きし「怪談のリアルとフィクション」と題した記念講演会を開催したことは大きなトピックとなりました。

加門先生はデビュー以来、一貫して「怖い」世界と真摯に向き合い続けており、講演会では、幼少期から学生時代までの怖い体験、創作への情熱、心霊体験を実話として語る場合と創作に活用する場合の心構えなどを語ってください



加門先生による記念講演会の様子



展示の様子

り、質問コーナーやサイン会も交え、県内外から駆け付けた熱心なファンとともに濃密な怖さ漂うひとときを愉しむことが出来ました。

かつて、高知出身の文学者・田中貢太郎は「怪談は面白い。ええものぢや。人間のいろいろな気持が深く集りよっちゃうきに、これは、文学の一つの究極ぢやと思うね。」と語りました。

加門先生も館報111号で「怪談はいつだって、愉しみと表裏一体だ」と語っており、怖い作品は感性や想像力を大いに刺激し、人によって様々な捉え方が出来る深い魅力があることが分かります。

今回、展示を通してそのこと教えてくれた加門七海先生をはじめ、香美市立美術館の皆様、創作人形作家・あだち杏先生と生徒の皆様、東雅夫先生、そして来館者の皆様に心より御礼申し上げます。

(学芸課／福富陽子)

おはなしキャラバンについて

「おはなしキャラバン」では毎月第一土曜日の午後2時から30分ほど、館内のこどものぶんがく室で土佐の紙芝居と絵本の読み聞かせを行っています。当館で活動されている、熟練のカルチャーサポーターの皆様が、時には生粋の土佐弁で紙芝居を語り、絵本も引き込まれるような臨場感たっぷりに読んでくださいます。5月の紙芝居は「てんにんのいと」、絵本は宮西達也先生の『おかあさんごめんなさい』でした。

紙芝居「てんにんのいと」は市原隣一郎先生が集めた高知の民話をもとにしたものです。

登場人物はいいところもあるけれど面倒くさいところもある、本当にいそうな昔の人たちです。高知の民話には「ひょうげ」や「い



「おはなしキャラバン」の様子

ごっそう」など、おどけ者たちが多く登場し、愉快な笑い話が多いのが特徴のひとつでもあります。また、今月の絵本は母の日も近いということで、当館にもご縁の深い宮西達也先生の『おかあさんごめんなさい』を選びました。いつもは当たり前と思っている、おかあさんへの感謝のきもちに気づける絵本で、読んでいる最中にいつのまにか隣のお母さんに、ぴたりより添っている男の子が印象的でした。

ふだんは小さいお子さんたちと触れ合うことが少ないのですが、「おはなしキャラバン」では笑顔で答えてくれ、反応がすぐ間近で見られますので、短いですがこちらも元気をもらえる貴重な時間です。

時には高校生サポーターの方にお手伝い頂き、合間にクイズをしたりもします。高校生は初々しくも、一生懸命にサポートしてくれるので本当に助けられています。

「おはなしキャラバン」を開催することのぶんがく室には、座ってゆっくり絵本を読めるスペースやたぐさんの積み木、柴田ケイコ先生の作られた、入って遊べる秘密基地もあります。「おはなしキャラバン」のある日もない日も、お近くにおよりの際にはぜひ、当館こどものぶんがく室へお越しください。

(学芸課／岩根令子)

土佐日記 風光の地

土佐から京へ旅をする紀貫之一行ですが、天候不良などにより「大湊」(南国市前浜か)で10日間停泊し、この地で京を思いつつ元旦を過ごす様子や、風流ある都人との交流が描かれました。次に向かう場所は「奈半の泊」。いよいよ本格的な船旅が始まります。国府からの出発以来、見送りにきては宴を催していた人々と「国の境(国府のある長岡郡の境域か)で離別し、「思ひやる心は海をわたれどもふみしなれば知らずやあるらむ」という独詠歌を詠み、情の深い人々との別れを惜しみます。

さて、「奈半の泊」に至るまでに「宇多の松原」という地名が見られます。この地は場所が定かでない、架空の地名とも言われますが、日記のこの記述を顕彰して夜須町手結山にあるホテル「海辺の果樹園」の南側の碑には、解説文と松に打ち寄せる波、飛び交う鶴が描かれる日記本文が刻まれます。松



「宇多の松原」に関する碑



「土佐日記那波泊」碑

と鶴は瑞祥のしるしとして平安時代初期に定着したようで、貫之も得意とした屏風歌などで土佐赴任前から松と鶴の歌を詠んでいます。屏風歌的な意匠ととらえていた松と鶴の実景を見たとき、何か感じたのでしょうか。この松原の記述は、日記に数少ない風景描写であることも印象的です。

松原を通過し、夜も更け航海に不安がつる中「奈半の泊」に到着。地名の通り、現奈半利町とされています。国道55号線の脇道にある奈半利駐在所前に「土佐日記那波泊」碑があります。近くに奈半利川の河口と穏やかな海が広がりますが、一行が進んだのは冬の荒れた海。また早朝に大湊を出発し約40キロメートルを一日で移動したことになるため、疲労困憊だったことでしょうか。奈半の泊では2泊したようですが、滞在の様子は詳しく記されていません。

碑の近くにある奈半利駅には土佐日記を紹介するプレートが設置されており、訪れる人々も気軽に土佐日記ゆかりの地であると知ることが出来ます。次回はこちらに南へ進み、室戸市にある碑を紹介いたします。

(学芸課/笠岡花菜子)

資料受贈報告

寄贈資料から

『阪急電車』有川ひろ著
有川ひろ氏 寄贈



左上：日本語版『阪急電車』(幻冬舎刊)
下段中央：『阪急電車(アラビア語版)』

有川ひろ氏は高知県出身の作家です。2003年に『塩の街』で第10回電撃小説大賞(大賞)を受賞し、翌年に作家デビューしました。「図書館戦争」シリーズで第39回星雲賞を受賞。「植物図鑑」、「キケン」、高知県を舞台とした「県庁おもてなし課」、「旅猫リポート」で、ブクログ大賞小説部門大賞を4年連続で受賞しています。

今回ご紹介するのは、映画化もされた『阪急電車』です。物語は、兵庫県の宝塚駅から西宮北口駅までを結ぶローカル線「阪急今津線を舞台に、8つの駅を往復する16話が収められています。婚約破棄に傷ついた女性、恋人関係に悩む学生、日常の中で新たな一歩を踏み出そうとする若者など、さまざまな登場人物の想いが電車内で交差し、それぞれを抱える思いや迷いと向き合っています。短い乗車時間の中で交わされる言葉やさりげない気遣いが重なり、登場人物たちは自分自身を見つめ直し、少しずつ前へ進んでいきます。本作は2008年に幻冬舎から出版され、その後多くの言語に翻訳されてきました。当館にはこれまでに、著者の有川氏より中国語、フランス語、タイ語、英語、スペイン語、オランダ語、エストニア語版を頂戴しており、さらにこのたび、アラビア語版も新たに寄贈いただきました。各国版の表紙はそれぞれ異なりますが、多くの国の版では1910年の開業

時から変わらない「阪急マルーン」と呼ばれるあざき色のレトロな電車が印象的に描かれており、タッチは違っても作品のぬくもりや柔らかな空気が感じられます。読み終えると思わず深い息がこぼれるような余韻が広がり、優しく温かい気持ちになる作品です。海外でも紹介されてきた本作をご寄贈いただき、あらためてその魅力に触れる機会となりました。

(学芸課/山崎真理)

受贈報告

(令和8年2月~4月)敬称略

- ▲柴田ケイコ「パパラギ南海の島の村長ツイアのスピーチ エリヒヒ・シヨイアマン著 松永美穂訳 柴田ケイコ画 光文社刊」
- ▲島中和華「The Man Who Died Seven Times: The Classic Time-Loop Murder Mystery」(七回死んだ男)英語版 西澤保彦著 Jasee Kikoodokushin Pushkin Press刊
- ▲柳田一弘「大町桂月没後100年記念十和田を広く世に紹介した奥羽一周記現代文訳マップ 明治の文人大町桂月の18日間の紀行文 大町桂月を語る会編刊」
- ▲尾形明子「女の世界」大正という時代 尾形明子著 藤原書店刊
- ▲四宮義正「徳島科学史雑誌44号 四宮義正編 徳島科学史研究会刊」
- ▲原田英祐「土佐日記-歴史と地理探訪(最終版)東洋町資料集第19集 原田英祐著刊」
- ▲高知県立大学文化学部「高知県立大学文化論叢14号 『高知県立大学文化論叢』編集委員会編 高知県立大学文化学部刊」
- ▲篠田たけし「句集 虚心 篠田たけし著 文学の森刊」
- ▲増田耕三「現代日本詩人選4 増田耕三詩集 庭の蜻蛉 増田耕三著 竹林館刊」
- ▲高知詩の会「詩よ、妻をはじめましょう 高知詩の会合同詩集2026 高知詩の会合同詩集編集委員会編 高知詩の会刊」
- ▲山形敬介「詩文誌 GUILTY 53号」ギルティ編集局編刊
- ▲川上隆幸「風通信 235号 最終号 風の会編刊」
- ▲佐々木光「没後99年文豪どもをブツ飛ばせ! グレイン坂本紅蓮魂のしおり 佐々木光著刊 他」
- ▲近代作家旧蔵書研究会「近代作家旧蔵書研究会年報第4号 近代作家旧蔵書研究会編刊」
- ▲ワン・パブリッシング「ムームー特別編集 図説日本の妖怪百科 宮本幸枝編著 ワン・パブリッシング刊」

このほか、全国の個人・関係機関の皆様から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

文学マイスター講座

好評開講中

高知県立文学館では、「文学マイスター講座」を開催しています。

今年（令和元（1926）年）から数えて満100年であることにちなみ、テーマは「昭和100年」。昭和時代に著された文学作品と作家、そして激動の時代背景について、講座を通じて学びませんか。

なお、引き続き受講者を募集しておりますので、受講希望の方は事前に文学館までお問合せください。

（学芸課／笠岡花菜子）

講義予定

※やむを得ず日程等変更となる場合があります

- 第1回 令和8年4月25日 終了
「生誕100年 宮尾文学の世界」
岡本美和（高知県立文学館主任学芸員）
- 第2回 令和8年6月27日
『龍馬がゆく』のスリルとサスペンス
広井護氏（元土佐中等学校国語教諭）
- 第3回 令和8年7月25日
「有吉佐和子と昭和1時代を変えた社会を変えた作家と作品」
岡本和宜氏（近代文学研究者）
- 第4回 令和8年9月26日
「100年前の私たちの旅―林芙美子・森茉莉・与謝野晶子、ヨーロッパとの遭遇―イザベラ・テイオ・シオ氏（文筆家／翻訳者）」



講義の様子

● 第5回 令和8年10月24日

「安部公房『燃えつきた地図』を読む―作中の新聞紙面を手掛かりにして―」
田鎖数馬氏（高知大学人文社会科学部教授）

● 第6回 令和8年11月28日

「宮沢賢治の故郷を歩く」
谷岡真衣氏（高知県立高岡高等学校校定時制
教諭／元文学館学芸課主幹）

● 第7回 令和9年1月23日

「昭和の沖縄文学―沖縄戦・米軍統治下・施政権返還を経て―」
翁長志保子氏（高知工業高等学校ソール
シャルデザイン工学科准教授）

● 第8回 令和9年2月27日

「生誕120年・中原中也の詩と人生」
池田誠氏（中原中也記念館学芸員）

● 第9回 令和9年3月27日

「戦争からの復興と作家たち―無頼派と三島由紀夫―」
田中裕也氏（高知県立大学准教授）

第29回 児童生徒文学作品 朗読コンクール 参加者募集中です！



地区審査

東部 8月10日（月）午前10時00分
田野町ふれあいセンター
多目的会議室

西部 8月19日（水）午前10時30分
大方あかつき館
レクチャーホール

高知 8月23日（日）午後1時00分
8月24日（月）午前9時30分
高知県立文学館
1階 ホール

※高知会場は多数の参加が見込まれるため2日間を予定

県審査

11月15日（日）午後1時00分
高知県立文学館 1階 ホール

※各地区審査より選出された児童生徒が県審査に出場します。

※特別審査委員として、松岡葵氏（KUTVテレビ高知アナウンサー）をお招きします。

申込み期間及び応募締切り

令和8（2026）年6月8日（月）から7月3日（金）まで

※当日消印有効

※詳細は当館ホームページの募集要項をご覧ください。

高知県立文学館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、毎年児童生徒文学作品朗読コンクールを開催しており、今年で29回目を迎えました。文学作品を朗読するためには、より深く作品世界を理解することが大切です。そして聴き手に自分の思いを伝えることは子どもたちに大きな喜びをもたらします。その喜びが、さらに文学に親しむきっかけとなることを願い、多くの子どもたちに参加していただきたくと考えています。

なお、県審査（11月）の特別審査委員には、KUTVテレビ高知アナウンサー松岡葵氏をお迎えします。松岡アナウンサーは文学館の朗読コンクールに小・中学生時代に出場して金賞を3度受賞されており、その当時の朗読にかける思いや、現在のお仕事を通して言葉をどのように大切にされているのかなどをお聞きできると思います。

是非多くの児童・生徒の皆さんの参加をお待ちしています。

（学芸課長／織田敦子）



あじさいの花が雨に
映える季節を迎えまし
た。

文学館の前の藤並の
森も、新緑が雨に濡れ
てきらきらと輝いてい
ます。

文学館では只今、企
画展『生誕100年記念 宮尾登美子展
『生きてゆく力』』を開催中です。

開催にあわせショップでは、書籍をはじめ、宮尾登美子の長編小説『錦』のモデルとなつた初代龍村平藏が創設者である京都「龍村美術織物」の商品を販売しています。ブックカバーやコイン入れ、キーケースやコースター、巾着等、色とりどりの模様がとても美しく、格調高い小物たちが並んでいます。

同じ品物でもひとつひとつ柄が異なるので、ぜひお手に取ってお気に入りを探してみてください。

(総務事業課/北川智絵)



館長エッセイ

「極限まで追求する姿勢」

澤田 博睦

牧野富太郎博士、やなせたかしさんの次は、2年後に生誕150年を迎える寺田寅彦博士を、と思っていたら、その年にNHKの大河ドラマ「ジョン万次郎」で、ジョン万次郎がモデルになるとのこと。ちょうど発表直後に当館で直木賞作家の山本一力氏の講演会があり、既に7巻刊行されている著書『ジョン・マン』の続編を執筆されるとの発表もありました。タイムリーな発表に会場は大いに盛り上がり、皆様とともに喜び合いました。

ジョン万次郎の地元土佐清水市、幡多地域はもとより、出港地の土佐市、ジョン万次郎の特設コーナーがある坂本龍馬記念館など、長年署名や誘致の取り組みを続けてこられた方、それを支えてこられた関係の皆様への感謝を心からお祝い申し上げますとともに、生誕地である高知県に多くの方の注目が集まることを期待したいと思います。

大河ドラマ「ジョン万」の放送は、当館の基本理念の一つである「高知県出身およびゆかりの文学者を顕彰し、高知の文学の魅力を伝える」うえでも、大いに追い風になると考えています。本県ゆかりの作家の一人、井伏鱒二が直木賞に輝いた作品が『ジョン万次郎漂流記』ですし、先ほどご紹介した本県出身の直木賞作家、山本一力氏の『ジョン・マン』もあります。極限まで追い詰められながら、最後まで諦めずに前を向き続けて未来を切り開いてきたジョン万次郎。この機会にもう一度読み返してみようと思う方も多いでしょう。

若き日の
ジョン万次郎
を描いた作品
には、文学だけ
でなく彫像も思
い浮かびます。



「極」

土佐清水市の
ジョン万次郎資
料館の近くに
は、「萬次郎少
年像」が設置さ
れています。
本県彫刻家の
濱田浩造作。

高知市長浜にある長曾我部元親初陣の像や安芸市の岩崎弥太郎像、榑原町の「維新の門」など、躍動感や重厚感のある数々の彫像を制作しています。

以前、制作風景を特集したテレビ番組を見つけて、人体のリアリティを求めてギリギリまで追求する姿勢に感銘を受けたことを思い出しました。ジョン万次郎資料館を訪れた方が多数ご覧になると思うと、何だか嬉しくなってきます。

「人の心を打つ作品を生むのには、自分自身血を流し、痛みを耐えながらその姿を人前にさらす勇気がなくてはならぬ。」6月28日に閉幕を迎える「生誕100年記念 宮尾登美子展」生きてゆく力』で紹介する宮尾登美子の珠玉の言葉。山本一力氏が姐御と慕う直木賞作家です。

表現者として、もがき苦しむ、極限まで追求する姿勢こそが人々の胸に迫り、感動を与えるものだということをしっかりと心に留め、作者と作品に敬意を払いたいと思います。

新職員の紹介

数十年前、文学館が郷土文化会館だった頃、小学校の自由研究で訪れたり高校美術展に出品したりしたことがある、思い出の場所で勤務することになりご縁を感じます。

勤務し始めてたくさんの高知ゆかりの文学者がいることを知り、学ぶことの多い日々です。県内外の方々にご来館いただき、快適に高知の文学の魅力に触れていただけるよう努めます。

(総務事業課/山下園世)

生誕100年記念

宮尾登美子展

～生きてゆく力～



- 会期 令和8年4月11日(土) ≫ 6月28日(日)
- 開館時間 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
- 休館日 会期中無休
- 場所 2階 企画展示室
- 観覧料 600円 (常設展含む)
長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

写真提供 朝日新聞社



展覧会の紹介をしています！詳しくは3ページ目をご覧ください。

7月6日(月)から7月8日(水)メンテナンスのため臨時休館いたします。

次回開催

体感する
ファール昆虫展

- 会期 令和8年7月25日(土) ≫ 9月27日(日)
- 開館時間 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
- 休館日 会期中無休
- 場所 2階 企画展示室
- 観覧料 600円 (常設展含む)
長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料



展覧会の紹介をしています！詳しくは表紙・2ページ目をご覧ください。

虫のいがお絵をかこう♪

- 昆虫標本をよく観察して、虫を描いてみよう！
- 講師 認定特定非営利活動法人 四国自然史科学研究センター 理事 宮地 萌氏
 - 日時 令和8(2026)年8月30日(日)
①午後1時～2時半 ②午後3時～4時半
 - 場所 高知県立文学館1階ホール
 - 参加費 要当日観覧券 ● 申込 電話または当館受付 (各回先着20名)

多彩な関連イベントも開催！

ダンボールで虫の標本をつくろう！

ダンボールの型に色を塗り、昆虫の形に組み立てます。ダンボールの遊具であそぶこともできるよ！

- 講師 株式会社タケナカダンボール
- 日時 令和8(2026)年7月26日(日)
①午前10時～11時半、②午後1時～2時半、
③午後3時～4時半
- 場所 高知県立文学館1階ホール
- 参加費 要当日観覧券+材料費300円
- 申込 電話または当館受付 (各回先着35名)

コパルみがきにチャレンジ☆

コパル(琥珀よりも若く半化石化したもの)をみがいて、虫を探してみよう！

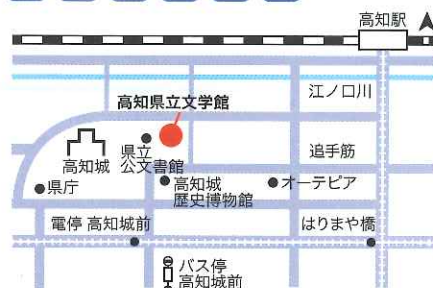
※コパルに虫が入っていない場合もあります。ご了承ください。

- 講師 佐川町立佐川地質館 学芸員 森 浩嗣氏
- 日時 令和8(2026)年8月2日(日)
①午後1時～2時半、②午後3時～4時半
- 場所 高知県立文学館1階ホール
- 参加費 要当日観覧券+材料費500円 (追加コパル300円)
- 申込 電話または当館受付 (各回先着30名)

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
- 休館日 年末年始 (12月27日～1月1日)を除き、無休
※その他、メンテナンス等で臨時休館することがあります。
- 観覧料 企画展開催期間 (常設展含む) … 企画展ごとに異なります。
企画展を開催していない期間 (常設展のみ) … 一般400円
20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。
身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、
戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者(1名)、
高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。
(窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります)
- 駐車場 なし。ただし近隣に有料駐車場があります。
- 附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」
- 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室
- 運営 公益財団法人 高知県文化財団

交通のご案内



- JR高知駅から徒歩20分 (またはバス・路面電車を利用)
- バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
- 高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」下車、徒歩20分

高知県立
文学館

〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

高知県立文学館 検索

